第２章　児童の実態

1，実態把握について

研究を推進するにあたって私達はいろいろな立場からいろいろな実態調査を実施した。その各々の目的については各項で述べるが、全体としては次のような考えで調査し、指導に生かそうとした。

a，指導後の実態と比較するために基礎データを残す。

b，標準化されたテストだけではなく、研究の意図に沿った調査を工夫し作成していく。

c，できるだけ見やすい処理を工夫する。

d，調査が調査で終わらないよう、その目的をはっきりさせて調査をすると同時に、結果を指導の中に意図的に生かす。

e，発達段階に目を向け、健常児が各発達段階で示す特徴をしっかりふまえた指導法を取り入れていく。

f，能力の落ち込みに目を向け、できない面への直接の指導のみをするのではなく、それを引き上げていける手がかりになる能力にも目を向ける。

g，データは個人の指導に生かすのみでなく、小学部全体の指導に生かせるよう学部単位で処理をし、傾向をとらえ、合同学習等の指導に生かしていく。

2，障害の種類、程度

小学部の児童の障害の種類並びに程度については次の様である。

a，障害の種類

障害名	自閉症	てんかん	ダウン症	言語障害	染色体異常
人数	3人	2人	4人	3人	1人

b，知能段階について

小学部の児童を知能段階別に分けると次の様になる。

知能段階	重度	中度	軽度
人数	1人	9人	3人